

(次頁) 研究 NO.1509 「出づくりの村「語り部」による二拠点型居住の伝承」の論文は、
「住総研 研究論文集」NO.43, 2016 年版で発表されていますが、不適切な箇所がありましたので、差し替えをいたします。

出づくりの村「語り部」による二拠点型居住の伝承

—長野県阿智村清内路集落におけるエコミュージアム活動から—

主査 大原 一興^{*1}

委員 藤岡 泰寛^{*2}, 江水 是仁^{*3}

山間にある長野県阿智村清内路集落では、集落中心部には耕地が確保できないため、日当たりの良い斜面の高地に耕作地を求め、そこに夏の間一定期間過ごす「出作り」をしてきた。この風習の現代的な継承のために、経験者による「語り部」の可能性が考えられる。現在では本来の出作りも語り部もほとんど消滅した。本論文ではかつての生活の想起、出作り民家の実態と生活の変化と経緯などを総体的に記録し、先行研究の上にこの地域遺産の地図上へのプロットを作成し空間の実態を明らかにした。伝統的な出作りが衰退する中、本宅と山の家との二拠点の存在を活かし新しい生活スタイルを示唆する家も見られた。また、その地域文化の伝承を進めるエコミュージアムとしての活動実態の調査およびその可能性についても考察した。

キーワード：1) 出作り, 2) 語り部, 3) エコミュージアム, 4) 山間集落, 5) 二拠点生活, 6) 文化継承, 7) 地域遺産, 8) セカンドハウス, 9) マルチハビテーション, 10) 空き家

CULTURAL INHERITANCE BY OLD TELLER OF OUT-GOING FARMING "DEZUKURI"

-A study on Seinaiji community in Achi-mura Village, Nagano as an ecomuseum-

Ch. Kazuoki Ohara

Mem. Yasuhiro Fujioka, Tadahito Emizu

Seinaiji district of Achi-mura village, Nagano have been keeping the custom of "out-going" farming called "Dezukuri". With its steep slopes and deep gorges, it has few patches of plain-land. Under such circumstances, the villagers cultivate on the mountain slope and build a small house in which they stay during summer. But with the development of modern commercial economy and social change, the unique life style has declined with only a few exceptions. This study describes the places where mountain houses were settled, how people managed to maintain them and what is needed as an ecomuseum activity for the cultural inheritance by old peoples who tells stories about the life.

1. 研究の目的と方法

1.1 はじめに

「出づくり」^{注1)}とは、「生活の本拠となる集落から遠く離れたところに耕地があり、毎日往復して作業を行うことが困難な場合には、そこに小屋をたて、一定期間移り住んで農作業を行い、収穫を終えた後、本拠とする村に帰ってくる」慣行（日本民俗辞典）のことである。

長野県阿智村の谷合の村、清内路集落（旧清内路村）では、4月から10月までの夏の間、日当たりの良い耕地を求めて山の上の家に家族全員で移住し耕作し、冬は耕作地の小さな麓の集落に帰って生活をしていた。この生活がNHKテレビの番組で紹介され、そのタイトル「出づくりの村」によって、出作りという名称が使われるようになったという。テレビ番組では、山羊、羊、ウサギなどの家畜、時計や家財道具を一式かついで、全員で山に引

越す大移動の光景が撮影されている。耕作地のある山の上の家については、通例、それ以前も含めて「山の家」と呼び、麓の集落にある本宅を「村の家」と呼んでいる。

一方で、阿智村全域では、村民全員が学芸員として地域の歴史文化、生活や建物を守り伝えていくエコミュージアム活動「全村博物館」を展開している。そのうち清内路地区は現在人口は580人あまりだが、かつて大正末期には2,000人以上の村であり、平成21年阿智村と合併した。現在ではほとんど以前のような「出作り」による二拠点生活は行われていないが、住んでいる人々には独自の村への思いは強く、独自の文化や歴史、自然、産物を生かした活動がなされている。現在、出づくりの山の家が残っているのは数十軒だが、このような生活の体験を持っている高齢者のうち数名の人々が今でも夏の間は山の上に居住し、子どもたちや若者からの要請に応じて、

^{*1} 横浜国立大学大学院教授・工学博士 ^{*2} 横浜国立大学大学院准教授・博士（工学） ^{*3} 東海大学講師・博士（工学）

そこでの生活を語る「語り部」となっている。また、空き家となった山の家は、都会からのＩターンの山村移住者にも貸し出されている。

一般に、我が国における超高齢社会化と人口減少の傾向から、とりわけ農山村部では空き家の増加と低密度社会が必須である。一家族に一住戸という原則に固執することなく、複数拠点や地域全体を住みこなすための居住の術が必要となっている。このような来るべき時代における住生活の知恵を、この事例から学ぶことができると、今後の複数拠点型の住み方への何らかの糸口が見つかるかもしれない。複数住戸や地域空間の活用により、高齢者が自らの記憶と生活経験を伝承できる拠点としての住宅の役割を明らかにすることによって、次世代への生活の継承という高齢者の根本的な生きがいを保障するような、よりよい住生活のあり方のモデルを考察したい。そこにおける組織や体制作りのひとつとして、地域のエコミュージアム展開の方向を探ることもまた重要な課題と考える。

1.2 研究の目的

「出作り」というほぼ消滅してしまった風習の形態が民家として残っており、さらにそこでの体験を語る語り部が存在する大変貴重な地域であるという点から、消失していく貴重な事例を記録する上でもこの調査研究が喫緊の課題であると言える。

本研究では、まず、阿智村清内路地区における出作りの風習とそれによる山の家の実情を記録することが必要とされる。これまで、所有者側から見た山の家のリスト化は市川^{文1)}により試みられているが、山の家そのものの個々の地理的分布や小屋の建築的条件については研究記録が残されていない。消滅しつつある時期に記録を保存することが最重要と考えられる。その作業を経て、出作りの実情とそれに至る経緯、生活の変化や現代の生活ニーズについて考察し、二拠点居住のもつ意味について考察する。

また「出作り」風習のある当該地域における、高齢者を中心とした住民の意識、それを支える組織やNPO活動、全村で取り組んでいるエコミュージアムに関連する様々な活動など、総合的にこの地域の調査を行い、「出作り」による二拠点住居の形式が現代においてどのように利用されているのかを把握することを目的とする。

さらに、これにより、山の家を活用したエコミュージアム活動による高齢者による地域全体の活力向上策に役立てたいと考えている。また、この出作りの民家で展開される高齢者の「語り」活動や伝承の活動から、出作り集落の構造を捉え、そのソーシャルキャピタルや高齢者自身の生きがい、とくに世代継承性（generativity）を基礎にした生涯学習的効果の端緒についても最後に考察

を加えたい。

1.3 「出作り」研究の意義

本研究は単に農山村の特殊な構造を記述するにとどまるのではなく、それが、わが国の直面する超高齢社会におけるひとつの手がかりとしての複数住戸所有とその活用方法を考察することにつながる。現実に出作りにはかつての生活を経験する高齢者が季節限定の少し離れた隠居屋として住む可能性がある。このような二拠点居住について考察すると共に、人口が減少している農山村部での空き家の対応や活用策を講じる上で参考となろう。

このような出作りに関する既往研究としては、本研究で対象とする清内路地区はむしろ特殊な事例であり、出作りに関しては全国的にいくつかの事例が報告されている。

清内路地区やその出作りを紹介した研究としては、代表的なものとして市川らの参考文献^{文1)～5)}にまとまっており、中でも、次の2つの文献は大いに参考にした。

市川康夫著「近現代の出作りにみる山村の生活と農業形態—長野県旧清内路村を事例として—」2013年^{文1)}が、明治期から現在へと至る出作りの変遷とその特徴に関する考察をまとめた論文。旧清内路村の出作りに関する風習の概要や、近現代の出作りにみる山村の生活と農業形態に関して2011～12年の最新のヒアリングにおけるデータが載せられている。旧清内路村の概要と出作り、下清内路における出作りの変遷、下清内路の中心集落における出作り世帯の分布と特性、下清内路における出作り世帯の属性と山の家の利用方法などが示されている。

森謙二編「出作りの里 その民俗と歴史」1989年^{文2)}は、学生による清内路調査に基づいてまとめた報告書を土台として、清内路の家とムラについてまとめたものである。これにより、時代の変化に伴い清内路の生業形態が変化していく中で、出作りが出現するようになったことが示されている。

また、清内路以外でも、出作りの習慣は全国的に見られており、代表的なものは石川県白山麓周辺に見られる「白峰の出作り」だが、この小屋は白山麓民俗資料館に移築保存されている。また、島嶼部での出作りなどについても報告が見られており、これらについては、市川他^{文7)～11)}で述べられているが、いずれも現代まで出作りを継続させているところはきわめて少ない点で下清内路の事例は貴重であると言えよう。また、白山などと比べると下清内路の山の家は小型であり、小屋に近いものとなっている。なお、阿智村についての調査資料^{文12)～16)}も参考にした。

1.4 研究の方法

1) 文献・資料収集と現地実態把握

資料、文献等も活用しつつ、まず地域の現在までの出作りの民家の分布や歴史を明らかにし、現状の実態調査を行った。他地域の事例も調査し清内路地域の特徴を考察した。

住民にかつての暮らし方と共に現在までの使い方の変遷をヒアリングし、実際の現在の利用の仕方と将来の予定などを具体的に調査した。これまで、阿智村清内路において山の家を所有している人で、使い方の典型的なパターン別に、4軒について具体的に実情を聞き取ることが出来た。

出作り経験のある高齢者や関係者へのヒアリングをおこない、その活用の仕方や現在の生活、意識、また「語り部」としての語る内容の整理に至る経緯、また次世代に伝えたい内容の把握とその理由などを、時間をかけてインタビューし、高齢者自身の経験や記憶を語ることによる生きがい形成についての手がかりを得る。

実測調査は、2015年11月、山の家3軒の許可を得て、間取りを採取し増改築部分の痕跡を探ることで、山の家が時代と共にどう変化するかを探る。

今回確定した山の家リストの所有者77軒のうち、清内路に在住の人に対し、今後の山の家に関する意識をアンケートでたずねた、回収は20軒であった。

2) エコミュージアム活動と支援体制の把握

エコミュージアムにより、地域の伝統文化を次世代に伝える活動を行っている人たちの実態や意識を関係者各所にヒアリングし、「語り部」から話を聞き出す活動などを行っている側の人たちの、その意義や意識を把握し、伝統文化継承のための支援方法やその組織の構成の仕方について考察する。

阿智村全域、全村博物館における住民の意識、とくにソーシャルキャピタルや世代継承性（ジェネラティビティ）に焦点をあて、エコミュージアムによる社会教育活動との関係性などを調査した2012年調査の結果を参照して考察を加えた。

2. 清内路地域における出作り

2.1 下清内路地区における出作りの概要

（本項は上述の文献^{文1,2)}を要約し紹介するものである）

旧清内路村内は、西側の上清内路と東側の下清内路の2つに分かれ、木工業を中心に行商や土木作業を主な生業としていた上清内路に対し、農業的性格の強い下清内路において出作りが上清内路よりも盛んに行われてきた。春祭り（4月24日頃）が終わったところから秋祭り（10月7日頃）が始まるころまでの夏の間、出作り小屋に家族全員で移住し耕作し、冬は中心集落の母村に帰って生活をしていた。子供も一緒に出作り先へ移住するため、山の上から学校へ通っていた。清内路は谷間の村で、村全体でも1町1反の土地しかないため、日当たりのよい

耕地を求めて4反歩ほどの耕地を確保できる山の土地に夏だけ引っ越すのである。このような生活が昭和36年にNHKが制作した「出作りの村」によって紹介され、「出作り」という名称が使われるようになった。

表 2-1 下清内路地区の出作りの経緯（森^{文2)}、市川^{文1)}より）

年	出来事	
18世紀以前	焼畑＝雑穀栽培を中心として木挽・木地・炭焼きなど多様な山仕事に従事。	
18世紀以降	雑穀栽培を部分的に維持。 一方で煙草耕作が盛んになる。	
1882年(明治15年)	『煙草税則』（太政官布告163号）の改正。	
1886年(明治19年)	長野県下に『養蚕の奨励』（勸業課広告第3号）が出される。	
1887年(明治20年)	清内路集落で養蚕が始まる。	⇒この段階では煙草耕作が依然として優先される。 養蚕は生産価格でも煙草の1/11に過ぎなかった。
1900年(明治33年)	煙草の専売制が施行。	⇒煙草についての過酷な税負担および煙草製造販売の専売制の施行は、煙草を中心として生計を立ててきた清内路の人たちに大打撃を与える。
1902年(明治35年)前後	清内路の主要産業が煙草耕作から養蚕へと急速に変化。	
1911年(明治42年)	江戸時代から続いていた清内路煙草の耕作が全廃。 これに代わり、養蚕が拡大していく。 養蚕の拡大に伴い、製糸工場も発展。 この燃料となる大量の木炭の生産にも拍車がかかる。	⇒清内路では春から秋にかけての養蚕、冬場の炭焼きという産業構造が確立。 同時に、養蚕の興隆による桑園が増加。 ①下清内路集落周辺に耕地が少なかったこと ②養蚕が一定の季節に集中的に労働力を投下する必要があること の2つの主たる要因により、「出づくり」耕作が下清内路で定着した。
1920年(大正9年)～昭和初期頃	養蚕業が全盛期をむかえる。	
1929年(昭和4年)	世界恐慌	⇒この影響を受け、生糸の暴落・木炭価格は暴落。清内路は壊滅的な打撃を受ける。 これを境に、養蚕は減少し、ふたたび煙草耕作が行われた。また、木材の生産も増加 戦後も、煙草・養蚕・木炭が並行して生産。 （戦時中は食料増産のためイモやトウモロコシを栽培。）
1979年(昭和50年)以降	養蚕は減少の一途をたどる。 これに代わり、みょうが・椎茸・野菜類などの新しい換金作物が生産される。	⇒その後農業事態が衰退化の傾向にあり。

出作り先に一度出かけると、食料の買い出し、組の寄り合いや盆や葬式があるとき以外には、里の家（生活の本拠となる家）には帰らなかったようである。日常的に使う家財道具等は、出作りの家にも備えておくか、あるいは里の家から運んでいたという。今回のヒアリングでも、これらのことは確認できた。

表 2-1 には、下清内路地区の出作りの経緯についてま

とめたものを示している。さらに、森^{文2)}による清内路地域の生活や生業の歴史の時代区分、および市川^{文1)}を参考にしてみると、およそ出作りの変遷はⅠ. 煙草出作期(近世中期から明治20年代末)、Ⅱ. 養蚕出作期中心期(明治30年代から1940年代末)、Ⅲ. 出作期衰退期(1950年代から1980年代末)、Ⅳ. 通い耕作中心期(1990年代以降)の4つの時期に分けられるとされている。

このようにして、出作りが衰退していったことが2013年に報告されている^{文1)}が、それまでの出作りのおよその戸数はどのようなだったのかという点、昭和初期は60戸ほどと言われ^{文1)}、1973年の調査^{文4)}によると約70戸、それが1985年の調査^{文2)}では43戸、2012年の調査^{文1)}で5戸となった。出作り以外の用途としては同年の市川による最新のヒアリング調査^{文1)}によると、定住が11戸、通い耕作が21戸、空き家・廃屋が16戸とされている。

2.2 出作りの家の現存状況の把握調査

まず、阿智村清内路地区全体の出作り慣習の歴史と現在の実情について、村役場職員、学芸員、文化財委員、地域の住民らにヒアリングをし、既存資料を様々な側面から収集した。これら過去に調査された資料等を重ね合わせて、現在までの出作りの民家の分布状況を住宅地図上にプロットすることを試みた。

現在の出作りの家(夏に利用していた山の家)の利用と維持管理の実情について、空き家や廃墟となっているものを含めてヒアリング、実地踏査と確認により、写真撮影や利用状況などの把握をした。できるだけ全体の状況を網羅するよう情報と資料の収集を試みた。

まず、先述の市川論文^{文1)}では、昭和初期の『家屋臺帳』に記載された家屋の中から、中心集落以外の山間部に蚕室を所有している農家を抽出しており、2011-2012年の調査の結果、91戸が下清内路で昭和初期には存在していたことが明らかになっている。この91戸のリストが、所有者側から見たリストであるのに対して、地域住民や文化財委員の桜井正彦氏らによって、現存する出作りの山の家の写真撮影や所在の確認作業が進められていた。これは、実際の山の家からみた情報であり、まずこのひとつひとつの内容を住宅地図上にプロットした。結果的に山の家にあたる家屋は数年前には存在したと思われるが現存確認できないものも含めると97戸と思われる。この中には、山を家の建物の存在はあるが、すでに相当以前から定住している(出作りではない)例、中には建て替えて新築となっているものや、他人に賃貸しているものなどもある。また、2、3年前に撮影できたものの、実際には廃屋になったものや朽ちて消滅したものなどもある。それらを対象外として該当しないものとして省くと、今回確認できた山の家は77戸ということに

なった。地図上でその分布を見ると図2-1のように、沢伝いにかかなり高地まで点在していることが分かる。

結果として今回確認できた山の家の用途は、表2-2のように分類される。本来の出作りをしている家は、もは

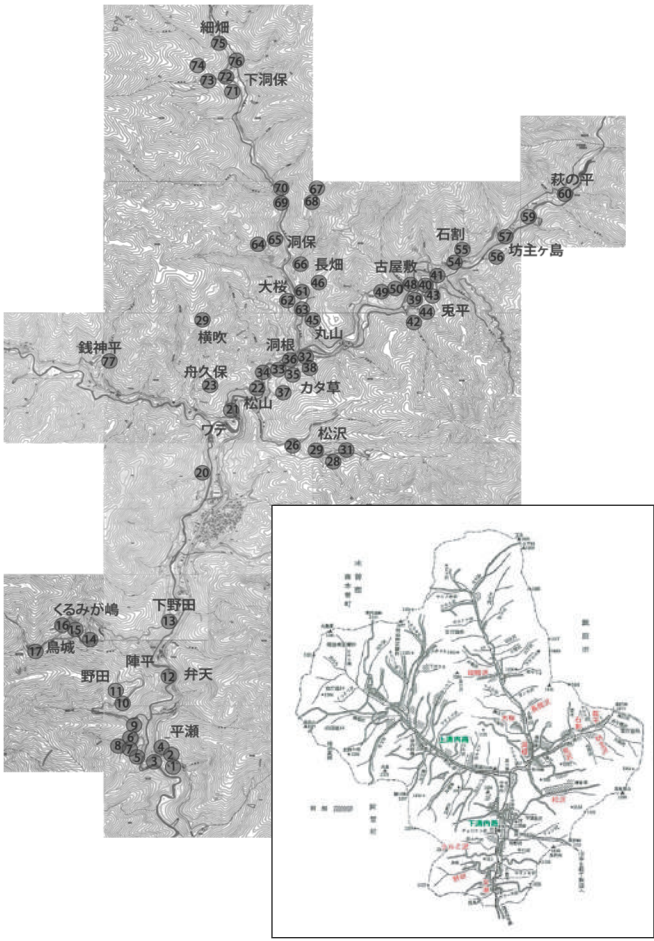


図 2-1 清内路地区の出作りの山の家の位置図
国土地理院の地図上に山の家をプロットしたもの。参考地図の出典は、阿智村教育委員会「わたしたちの阿智村」^{文15)}p.138

表 2-2 山を家の現状

	確認対象事例	対象外	計
出作り	1	0	1
定住	2	6	8
季節定住	1	0	1
通い耕作	27	0	27
売却・賃貸	2	2	4
空き家	19	4	23
廃屋	17	2	19
消滅	7	1	8
撤去	0	1	1
不明	1	4	5
合計	77	20	97

や1軒のみとなっている。利用している場合の多くは、通い耕作としての利用である。

利用せずに空き家となっている例も多い。空き家と廃屋は目視で明らかに使用に耐えないものを廃屋としているので、実際は廃屋状態になっている空き家も含まれている。

3. 「山の家」の実情

3.1 利用の実態

現存している「山の家」の中から、訪問許可の得られた家に対してヒアリングを行った。これらのうち、使い方のタイプ別に4例を以下に示す。出作り及び山の家との関わり方が変化するきっかけとしては、

- (i) 自身や家族が置かれている環境の変化
 - (ii) 加齢による身体機能の低下
- の2点が挙げられることがわかったので、それぞれのケースにおける出作り及び山の家との関わり方が変化するきっかけを以下の事例にそって整理する。

<①出作りの場合> 図 3-1

このケースでは、[出作り→通い耕作→出作り]と変化していった。それぞれの変化の要因は、
[出作り→通い耕作]⇒自身が社会人になること…(i)
[通い耕作→出作り]⇒収入増加の必要性があったこと…(i)であり、どちらも(i)にあてはめる。
と言える。また、[通い耕作→出作り]の変化は上記の要因以外にも、この後まもなくAさんが定年を迎え退職し自由な時間が増えたこと…(i)も要因として考えられる。

<②定住の場合> 図 3-2

このケースでは、[出作り→定住(→出作り→通い耕作)]と変化していく。それぞれの変化の要因は、
[出作り→定住]⇒自身の生活の中心が畑を耕すことであったこと…(i)
[定住→出作り]⇒Bさんが亡くなって妻Cさんが一人暮らしになったこと…(i)
[出作り→通い耕作]⇒加齢による身体機能の低下…(ii)
であり、これも(i)、(ii)の②パターンに集約することができた。

<③通い耕作> 図 3-3

このケースでは、[定住→通い耕作]と変化していく。その変化の要因は、[定住→通い耕作]⇒Dさんの祖父母が亡くなり、村にある本宅を守らねばならなくなったこと…(i)であり、(i)が当てはまる。

【CASE①: 出作り】

年	住まい方	家族構成	
昭和30年半ば頃	2拠点 	2拠点 祖父、祖母、母、自身、兄弟	▼夏は山の家、冬は本宅という暮らし方 【山の家での食料】 常備菜や常備食が主であったため、食料のなさに困ることはほとんどなかった。 【山の家に通んだ家具】 布団、なべ、ふろおけ等
昭和60年代年頃	定住 	不明	▼独立し、会社員として働くことをきっかけに、自身は出づくりと本宅の2拠点生活をやめ、本宅に定住するようになる。その後も休日は手伝いをしに山の家に通う。
現在	2拠点 	本宅(昭和40年頃) 母、自身、奥さん (子供が独立するまでは子供も) 本宅(現在) ご自身、奥さん	▼会社員で得られる収入だけでは暮らしていけず、再び自身も農業を営むため、出作りを再開。山の家と本宅の2拠点生活をするようになる。 ▼現在も、12月の雪が降るくらいからは村にある本宅に帰宅する ▼子供が中学生の頃にお風呂やトイレを改修するなど、現在の暮らしに沿うように適宜改修をしながら暮らしている。

図 3-1 山の家事例①出作り

【CASE②: 定住】

年	住まい方	家族構成	
昭和50年頃	2拠点 	不明	▼夏は山の家、冬は本宅という暮らし方 【山の家での食料】 野菜は自給自足のため特に困らず。お米のみ必要だったため、定期的に集落に買いにいった。
平成24年頃	定住 	山の家=本宅 ご自身、妻、子供 山の家=本宅 ご自身、妻	▼生活の中心が畑を耕すことであったため、畑のある山の家に移住。山の家=本宅として扱うようになる。 ▼H.Sさん亡くなる。
平成26年頃	2拠点 	出づくり=本宅 妻	▼H.Sさんの妻M子さん、冬季のみ息子夫婦宅に住むようになる。
現在	定住 	息子夫婦宅 息子家族、妻	▼妻M子さん、高齢のため息子夫婦宅に年中住むようになる。以後、畑の手入れのために山の家に通うようになる。

図 3-2 山の家 事例②定住

【CASE③：通い耕作】

年	住まい方	家族構成	
昭和40年頃		出づくり 父、母、自身、兄弟 本宅 祖父、祖母	▼生まれた時から季節関係なく山の家に定住して生活していた。 ▼本宅には祖父母が同じように定住。 【山の家での食料】 業者が近くまで米や魚などの食料を売りに来てくれていた。その他の菜や衣類も売りに来てくれていたため買い物には困らなかった。 【山の家に入れた家具】 本宅で不要になったもの⇒出づくりが物置化するきっかけとみとれる。
現在		本宅（昭和40年頃） 父、母、自身、兄弟 本宅（現在） ご自身、妻	▼祖父母の死をきっかけに本宅に移住（自身が30歳頃）。 ▼その後はほぼ毎日山の家に通っている。 【山の家でしていること】 農作業、農作業用の道具の手入れ、出づくりの屋根や雨どいの修理など（少しずつ手入れをしないと朽ち果ててく一方だとおっしゃっていた。） ▼出荷繁忙時は1週間ほど泊まることもある。

図 3-3 山の家 事例③通い耕作

【CASE ④：空き家】

年	住まい方	家族構成	
昭和60年頃		2拠点 義父、義母、夫、ご自身、子供	▼夏は山の家、冬は本宅という暮らし方 【山の家での食料】 一週間に1回くらいの頻度で街に行き、食料を一気に買って家族皆で歩いて持ち帰る。 【山の家に入れた家具】 ふとん、食器など
昭和64年頃		2拠点 義父、義母、夫 本宅 ご自身、子供	▼子供が進学するも、山の家からだ学校が遠いため、自身と子供のみ本宅に定住するようになる。 ▼休日になると子供を連れて山の家に通い、農業を手伝う。
平成20年頃		本宅 義父、義母、夫、ご自身、子供	▼義父母が高齢のため、本宅と山の家との二拠点生活をやめる。⇒出づくりの終了 ▼その後も自身と夫は畑を手入れしに山の家に通う。
現在		本宅 ご自身、夫	▼自身も夫とともに体力の衰えや体の不調のため通うこともやめてしまう。 ⇒以後放置状態となる。

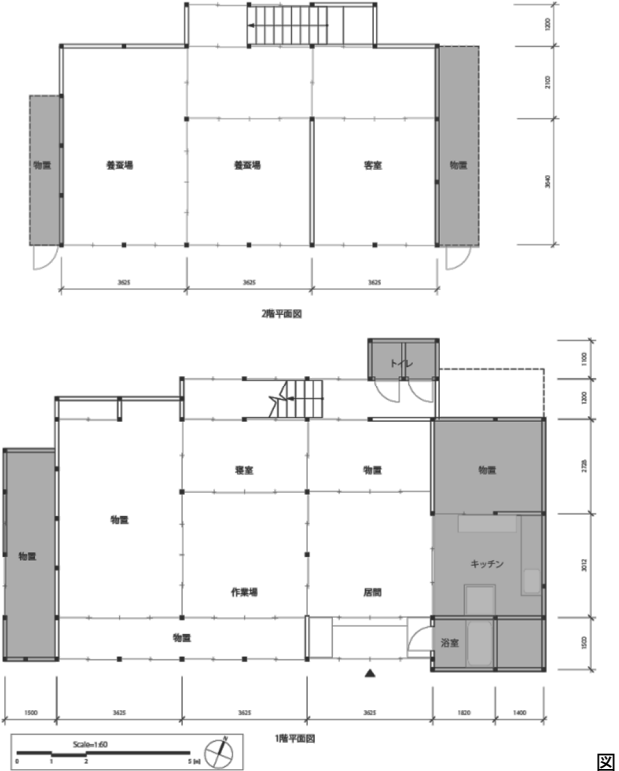
図 3-4 山の家 事例④空き家

<④空き家> 図 3-4

このケースでは、[出作り→通い耕作→空き家]と変化していく。それぞれの変化の要因は、[出作り→通い耕作]⇒Eさんの子どもが進学すること…(i)
[通い耕作→空き家]⇒加齢による身体機能の低下…(ii)である。
また、Eさんの夫と義父母が[出作り→通い耕作]と変化した要因も、義父母の加齢による身体機能の低下…(ii)であった。
このように、今回ヒアリングした4つの事例全てにおいて、出作り及び山の家との関わり方が変化するきっかけは上記に記した(i),(ii)の2つに集約できた。実際に、現在も出作りを営んでいる<①出作り>のAさんも自身の健康状態が良好なうちは出作りを営み続けたいと言っているように、加齢による身体機能の低下は、山の家が空き家そして廃屋となり、出作り文化が廃れていく1つの主要な要因であると思われる。

3.2 山を家の住宅平面の事例

今回2軒(②定住、④空き家)では実測調査の許可を得た。また、ヒアリングは行えなかったが、廃屋となっている山の家の実測調査も1件行った。



3-5 山の家<②定住> 平面図

まず、出作りの家は、外観は里の家とほとんど変わらないが、その内部は「蚕室」として利用されたために、一般的には仕切りのない広い部屋が中心となり、それに寝室と台所からなっている。

各平面図を見ると、増改築をした形跡がみられた。上図の平面図で網かけになっているところが増改築をした部分である。増築部の用途を見てみると、浴室、台所、トイレなど水回りと物置の2つに分類できることがわかった。

水回りは現在も使われている山の家ほど改築がされており、今回実測は行えなかった①出作りの山の家でも積極的に行われていた。Aさんの子が中学生になった頃に風呂やトイレを改修しており、現在では孫のために水洗トイレに改修されていた。また、⑤廃屋の山の家は外に台所があったが、②定住の山の家では台所が家の中に改築されていた。

このような改築が行われる背景として、かつてと現代で生活の中心が変化したことがあげられるだろう。養蚕が全盛期であったかつて、住民は蚕中心の生活をしていった。その時代は山の家に多少の不便さはあれども、自分たちの生活の豊かさは蚕の飼育の二の次であったと考えられる。しかし、現在も出作りを営むAさんも述べているように、現在は「自分たちが豊かに暮らす」ということが彼らの生活の中心にある。そのため、現代の暮らしに沿うように山の家は時代と共に改築されていると窺える。

また、ヒアリングをしていく中で、山の家は、村にある本宅で使わなくなった物を保管しておくための物置としての役割もあるということもわかった。実際に、これに加え、農作業を行う際に使う道具が時代と共に機械化し大きくなったために、山の家で暮らしていく中で物置がさらに必要とされ増築されたのではないかと考えられる。

4. 阿智村全村博物館と語り部による伝統文化の継承

4.1 全村博物館構想設立とその経緯

1992年に中央自動車道の園原インターチェンジができて過疎化が進んでいた園原地域の再開発が地域の人々によってとりくまれ始めた。開発の柱は、地域の持つ自然資源と園原を中心とした歴史資源を活用したものであったが、直接的に経済効果に結びつかない史跡保存は、多くの人に認識されないまま推移した。一方で、村内に昼神温泉が湧出し十数年が経ち、園原は新たな観光資源として着目され始めた。また、同時期に民間の企画会社より「園原万葉集」の発行が持ち出され、歴史や文学に関心のある住民によって検討された。この企画は経費等の問題で中止されたが、この時集まった人によって「東山道古文学推進協議会」が設立され、改めて東山道と園原の研究を行うことになった。そのような動きの中で園原を全国に発信するための施設の建設が村では議論されていた。村の財政問題とは別に、園原の史的価値の認識の低さや当時盛んに行われていた箱もの行政批判

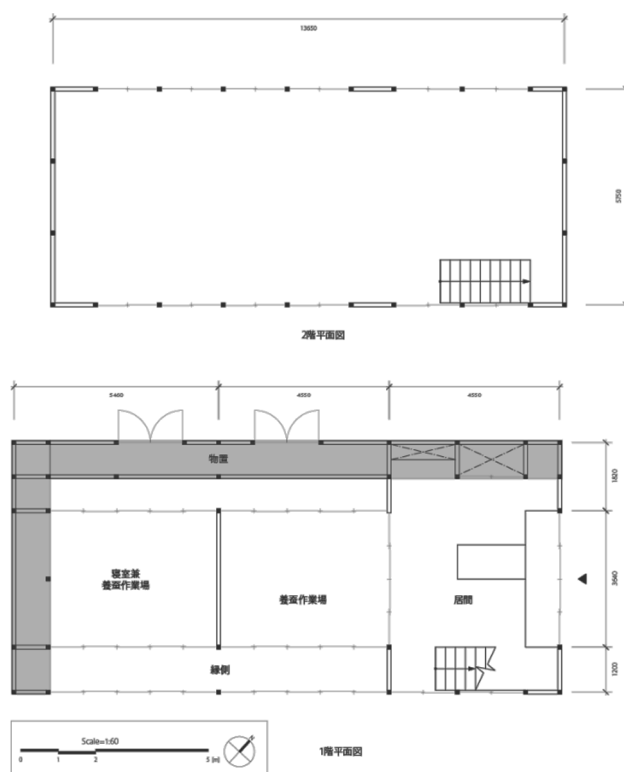


図 3-6 山の家<④空き家>の平面図

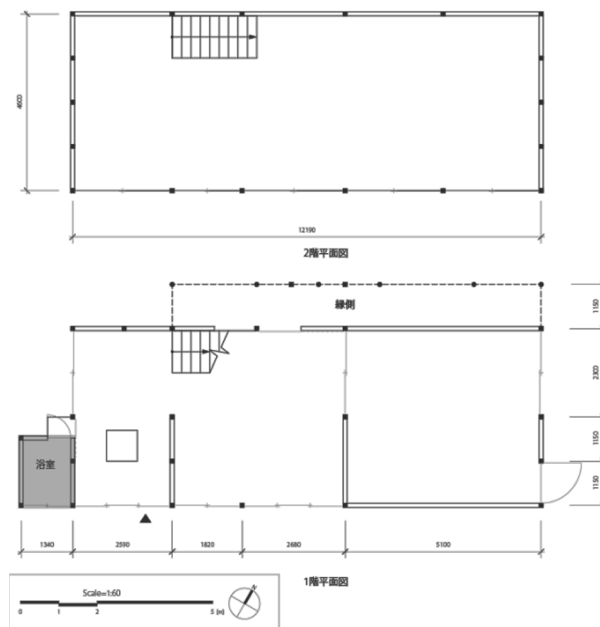


図 3-7 山の家<⑤廃屋>の平面図

や村の中心部に資料館を望む声もあり、村民合意が得られなかった。

しかし、「東山道神坂総合研究所」の設立総会において「地域ぐるみの博物館が阿智村の未来を開く」と題する講演会をきっかけとして、結果的には施設計画が進められることになった。それは、園原地域に特定して資料館を建設することにこだわらず、全村の歴史、文化、自然、生活文化をまるごと博物館化していく全村的な取り組み

の中で、全村の博物館のフィールドに誘う案内所として資料館を位置づけることが阿智の価値を高めることにつながる、という考え方が理解されるようになったからである。

以上の経過を踏まえて、「全村博物館構想」と名付けられたエコミュージアムの構想が誕生し、建設されたビジターセンター「はき木館」は、その中のひとつのサイトとして位置付いている。

『阿智全村博物館構想の提言』^{文13)}には理想とする村の暮らしについて次のように書かれている。「こうした全村博物館構想やエコツーリズム構想の深化の先にあるものは何であろうか？それは、自分の田や畑で有機農作物を作って食膳にのせたり、山の木を燃料に使ったり、伝統的な美しい建物や風景を残したり、これから徐々に整備されていく遊歩道で散歩したり、温泉療法を楽しんだりするような緑豊かなゆったりとした生活だと思われる。これまでのバブル期のように高額な給料を得続けることは困難になると思われるが、それが減少しようとも、それを補う心の豊かさがある暮らしである。」

このような考えをもとに、全村博物館構想では、3つのタイプ（公園・博物館・学校）の地域づくり運動を総合化するものとしており、将来的には、村全体が「公園」であり、「博物館」であり、「学校」であることを目指している。構想を進めるに当たっては、村では、2010年社会教育全国研修会、2011年日本エコミュージアム研究会全国大会を開催し、地域めぐりのツアーを企画するなど、地域活動を可視化する機会を設けるとともに、近年ではサイン、案内板の設置や地域資源の認定をおこなうなどの展開をしている。

具体的に全村博物館構想を担う住民による活動組織としては、主に以下の組織がある。

- ・阿智全村博物館連絡会：全村博物館連絡会はあっちち熱中人を中心に教育、文化、構成、産業、地域づくりなど各部門の関係者が連携を高め、より統一感のある全村博物館構想を進める体制として2010年に発足した。
- ・あっちち熱中人：各地域の活動の先頭をきって行く住民の集まりで、各地区の活動団体の参加者も多い。
- ・阿智学会：阿智村の歴史や自然、文化、経済産業、教育、福祉などを調査、研究する目的で2010年全村博物館連絡会の発足後に阿智学会を発足させた。個人やグループ、研究機関との共同研究や会誌の発行、研究内容の発表などの事業内容を計画しており、緩やかな活動ながらも地道に調査を進めていく方向である。

全村で活動するこれらの組織は、住民の自由な意思を尊重するために、名簿等は作らず、固定化した組織とならないようにしているということがうたわれている。

4.2 清内路地区における文化継承の取り組みと語り部

1) 清内路地区における活動

阿智村全村博物館構想の中で、清内路地域は、地域資源として、小黒川のみづナラ(国の天然記念物)、黒船桜、一番清水、姿見不動滝、花桃街道などの自然系の資源と、町並み、健康の森、手づくり花火、清内路あかね・かぼちゃなどの文化系資源に加え、出作り文化も重要な特色のある資源として保有している。

この地域における住民の活動団体としては、以下のようなものがある。

・おらほの夢先案内人(清内路)：清内路の案内人。2008年以降グリーンツーリズムの研修を受けた5人によって発足した。2012年には研修を終えた新人4人も加わる。メンバーのうち2人がIターン者で、若い世代の後継に悩む地区が多い中で、20代、30代の案内人もいる。

・清内路薬草研究会：地区のほとんどを占める傾斜地や遊休農地の活用策として、薬草栽培に向けた研究をしている。2012年に清内路の住民10人によって発足した。

・郷土食の会：清内路に伝わる箱寿司、朴葉寿司、五平餅といった郷土食を絶やさないための活動。夫婦4組8人で活動している。

・清内路民泊「ぬくもりの会」：村内9件の過程が農家民泊の開業許可を受け、清内路民泊「ぬくもりの会」を結成し、グリーンツーリズムの和を広める活動のひとつで、農業体験を中心とした体験型の民泊を行っている。

・清内路おこし協力隊：総務省「地域おこし協力隊」制度で清内路地区に配置されたメンバーによるもの。

・清内路村塾：自分たちで自分たちの地域を勉強しようという機運から始まった。中でも出作りについては、語れる方が存命のうちに話を聞きたいとして2015年から活動「出づくりツアー」をおこした。中学校から出発して歩いて山の家をまわるなど、トレッキングの一環としても行われている。

・空き家の会：移住者用の空き家提供については、清内路村振興室の窓口で行っているが、「空き家の会」として住民6人が、行政と共に実際の家屋の調査などを行っている。村の家の空き家(全60数件)の持ち主は全て把握している。山の家に関しては、基本的には通年通して定住できる家としては考えていないが、なかでも通年利用できそうな2～3件は空き家登録されている。

2) 出づくりツアーと「語り部」の実態

2015年より数回試みている「出づくりツアー」は、実施時期は、実際の出作り同様の耕作期間とし、作業をしている最中に訪問するようにしている。対象地は、袋小路になっており町並みがきれいで一番案内しやすいとの理由で主に平瀬を歩く。他には他地域より家屋の保全状態が良好であるとの理由で、くるみが島、洞根などを対象とする。

ツアーへの理解のある方も多く、耕作作業中でも所有

者がいれば内部も見せてもらえることがある。

ツアー参加者は、役場、観光協会、公民館関係者が視察のような形でくることが今のところが多いが、清内路地域に暮らす若年層（子育て世帯など）の住民を案内することも多々ある。この 3～4 年間では小学校の遠足のなかで、出作りを見に行くツアーも開催している。

「おらほの夢先案内人の会」では、実際に出作りについて直接体験を語ってくれる人を「語り部」として依頼している。ツアーでは事前連絡することで話を聞かせる仕組みを作っている。しかし、現在ツアーで話をしてくれる語り部は 2 人で、あと一人候補はいるがなかなか忙しくて対応してもらっていないのが実情となっている。いずれも 80 歳を超えた高齢者で、一人は体調が悪い状態である。

出作りに関しての語り方は自由で、台本はとくになく、単なる出作りの解説ではなく、それぞれの体験や現代文明に対する思いなどを語る。これまでラジオやテレビで取り上げられたこともあり、地域外の方の関心も高い。

その土地で実際に出作り文化を当時体験していた人々が語ることに意義があるが、人に伝え聞いた話では意味合いが異なる。昔のように 移り住む必要がなくなってしまったことから、実際の体験談として語り継ぐことは今後はきわめて難しい。

3) 空き家対策としての山の家の活用

山の家は、空き家として放置されている例が多いが、村では空き家の対策として、山の家の活用としてクラインガルテンのような貸し出しも考えてはいるが、インフラ整備は十分ではない（電話・電気・水道は通っているが冬季は水道が凍結する。）上に、もともと季節居住用の山の家に通年住むことは難しいことなどから、あまり積極的には進められていない。山の家は空き家として貸し出す場合は、村の家と山の家をセットで貸し出す（本来の出作りの形態のように二拠点生活を営めるように）と理想的と考えられている。

現在、山の家で空き家になった家屋を I ターンで借りているのは 2 件ほどあり、1 軒は 30 代の一人暮らし、1 軒はファミリー世帯である。

4.3 出作り文化の今後の継続に関する意識

1) 事例ヒアリングより

出作りと山の家の今後に関しては、今回ヒアリングした 4 名とも自身の家族とくに子ども次第という意見が得られた。

現在も出作りを営んでいる A さんに、出作りが廃れていっている現状についての意見を伺ったところ、『『出作り』という文化を守り抜いてはきたが、今と昔で生活の仕方がまったく違うので廃れていってしまうことは仕方がないと思う。昔の文化を現代に押し付けることはでき

ない。しかし、後世の人々が自ら『出作り』という文化に触れ、それを継承していこうとするならばもちろん応援したい。』とのことだった。このように、清内路の出作りを営んでいる、また、出作りを経験してきた人々はこの文化を継続していくことを決して強制するのではなく、あくまでも子世代の自主性に任せるというスタンスをとっていると感じた。

しかし、いまでも出作りと山の家に関わっている人は、山に通ったり畑を耕したりすることが自身の生きがいになっており、豊かな生活を送れる一因だと感じているようである。実際に、現在通い耕作を行っている D さんからは「毎日山の家に通って畑や山の家を手入れするという習慣があることで、本宅で何もしないで過ごしているよりも健康的に暮らせていると思う。」という意見をいただいた。出作りという文化を通して学んだこと、さらに現代の暮らしに生かせることは数多くあると彼らが実感していると窺える。彼らが定年後も社会の中に自らの居場所を「出作り」の文化によって得られたように、子の定年後の暮らしの選択肢が広がるよう自身は責任を持って現状を保っていきたいと考えているようだ。

また、今回ヒアリングした 4 名の方全員が子はもちろん孫にも出作りという文化について語り継いでいると分かった。

2) アンケート調査による伝承への意識

今回、下清内路地区の山の家の 77 戸を対象に、下清内路居住者約 50 戸に対して出作りの実情と今後についてアンケート調査をおこなった（2016 年 9 月）。これには、出作り文化の伝承を促す啓発的な意味もある。郵送で回収した結果、20 軒から回答があった。そこで、1 軒について世帯主と別の 2 名分の個人票を依頼していたため、この個人票は 39 名分回収できた。例数が少ないため、統計的な分析は信頼性に欠けるが、以下、特徴的な点だけについて、概要を述べる。

「今後出作り文化が消えてしまう可能性があることについてどのように考えるか」を聞くと、全体 33 のうち、

残念に思う	7
消えたほうがいい	0
どちらとも言えない	19
その他	7

との結果であった。もちろん消えた方が良いとは思っていないが、自分としてはどうしようもないという意見がほとんどであった。

次に、出作り文化継承の手法として、どのようなものが考えられるか尋ねたところ、

郷土資料の文献として残せば十分	23
語り部の方が話しているところを	
映像として残す	8

昔の暮らしを再現した VTR や	
ショートフィルムとして残す	11
次世代の語り部を養成する	1
その他	2

となった。なかなか語り部として直接的に口述伝承するという方法については関心が低く、記録や資料として残すことで十分と考えている住民がかなり多いことがわかった。

全体的に、出作り文化の特殊性や価値について理解が高いとは言えず、地域遺産の価値についての一般的な認識は低い状態と言える。また、この意識の低さが、この地区においてとりたてて保存行動がこれまでわき上がってこなかったことにも通じるのではないだろうか。

ここで、2012 年に実施した調査^{注2)}の結果から、全村博物館に関わる人のソーシャルキャピタルや世代継承性 (generativity) について分析した結果をあわせて図示すると、一般に、阿智村では両者ともに、エコミュージアムに参加または関心を持つ人はそうでない人に比べて得点が高い。すなわち、社会的な交流が活発で次世代に何らかのものを伝えたいとする意欲が強いことがわかっている。

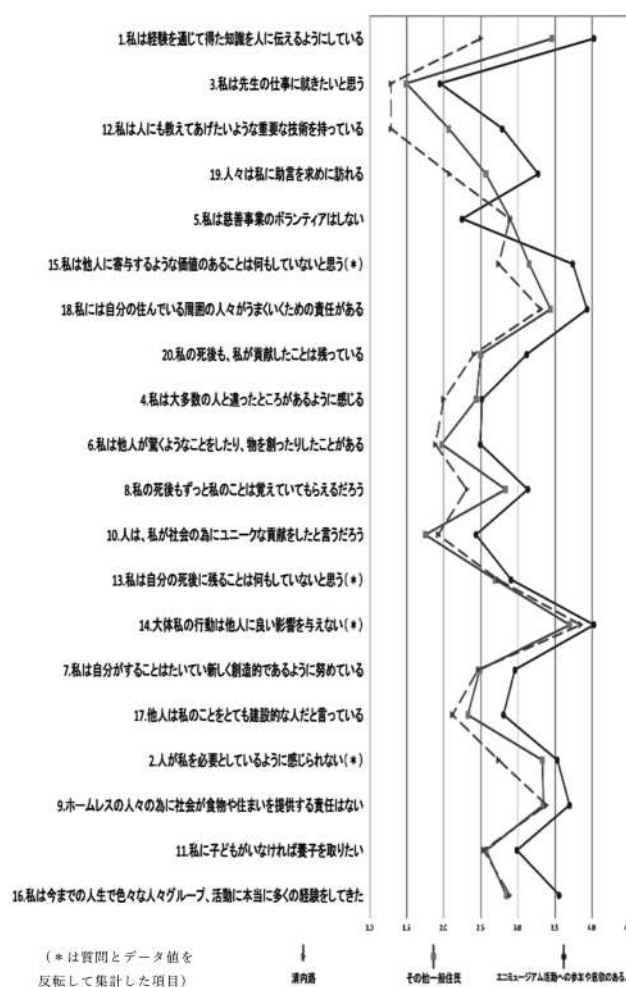
そこで、今回の出作り対象家屋の所有者に対する世代継承性のスコア (McAdams^{文17)}による)を比べてみると、今回対象住人は、エコミュージアム活動に関わりの無い一般村民と同等か、むしろそれよりも世代継承性の値が平均的に低いことが示された (図 4-1)。残念ながら、この地域の住民の世代継承性は総じて低いとの結果で、そのことがまた結果としての山の家への無関心や放置などを引き起こしている可能性もある。ただし、村全体の調査結果から言えることは、そのような住民でも、これまで参加してこなかったエコミュージアム活動に、今後参加することによって、世代継承の意識が高まるのではないかということを希望的に指摘しておきたい。

5. おわりに

5.1 これまでに得られた知見

現状で出作りを実施している事例は、予想よりも少なく現在ほとんど無い。この数年間で住民の高齢化により対象家屋での経験者が急激に減り、その結果として、廃屋や空き家など放置されるものがほとんどとなっている。

変化の要因の多くは加齢や家族構成の変化など個人的な要因である。利用の仕方としても、別敷地の耕地として通い耕作の際にのみ、家屋は休憩場所として使用されるなどの利用にとどまっており、出作り文化は明らかに廃れていっている。この傾向は市川^{文1)}千葉^{文3~4)}などが指摘しているが、それが急速に進んでいることが分かった。



4-1 世代継承性の得点

また山の家を現状を、具体的に立地の特定・実測に基づく空間条件と生活行為との関係、増改築など時間的変遷を明らかにした。市川の指摘^{文1)}では、①定住 ②通い耕作 ③空き家・廃屋の3つに分かれるとされているが、これに出作りを含めた4軒の住民にヒアリングし、現在のケースに至るまでの出作り及び山の家との関わり方の変遷について聞いたところ、その社会的な背景における経緯については市川論文と概ね同様の知見が得られた。ただし、全体的に放棄されるケースが多い中、山の家との関わり方は各世帯の個々の事情によって様々であり、文化を継承する意識はあるものの出作りを終了する臨界点はその地域環境等の外的な条件というよりも、主として管理してきた高齢の利用者の身体の変化や家族の暮らしの変化等の個々の生活上の条件と世代継承性によって異なっていることを指摘したい。

維持してきた担い手が急速に失われてきており、語り部として活躍してきた当事者も現在ほとんど居なくなっているところで、この地域においてエコミュージアムとしての活動手法と可能性があることは分かったが、多くの人の意識変化を促すには時期的に遅い段階と感じられ

る。せめて、白山麓の取り組みのように、出作り民家を移築保存することでもできれば物理的な保存はかなうが、現状の全村博物館構想では、建物の保存に関する具体的な計画ができていないのが現状である。

5.2 下清内路の出作りにみる可能性

高齢者にとっては、かつて経験のある「山の家」で自らが主体的にふるまうことができ、さらに「語り部」などとして経験や知恵を次世代に伝える上で貴重な場が確保されることになる。この視点から、住宅の「日常の住まい」と「もうひとつの住まい＝仕事の間」としての二拠点性の重要性が改めて指摘できる。高齢者にとっては、ここでいう「仕事」とは、経済的な収入を得る就労ではなく、繰り返し日常生活と一体的に行われきた、遊び仕事 minor subsistence として、生きがいにも近い概念として捉えることができる。高齢者の生きがい対策としての意義がこのような二拠点住宅にはある。市川^{文1)}は「気分転換としての農業や寝泊りなど、出作り世帯におけるその意義が変化している」と述べている。類似した指摘ともなるが、実際、通い耕作は必要に迫られた農業というのではなく、単なる気分転換でもなく、第二の空間、余裕の生活としての利用がみられていることから、今後増大する空き家の活用方法として示唆を与える利用のしかたのひとつと言えよう。

最後になりましたが、調査にご協力いただいた地域住民の方々に、深甚なる謝意を表します。

<注>

1) タイトルでは、阿智村の出版物や教科書などに頻出する「出づくり」を用いたが、他の地域の実例などにおける文献においては「出作り」という表記が多いことや、下清内路を対象とした文献でも少なくないことから、本稿でも、文中では後者を使用することとした。なお、定義は坂口^{文16)}を参照した。

2) 2012年11月に全村博物館等に関する意識調査をおこなった。対象は全村民から無作為に抽出した532世帯で、各男女2通の調査票を配布し、回収は190件(回収率18.16%)であった。調査項目は、ソーシャルキャピタルや世代継承性、阿智村での生活、全村博物館構想への意識などである。

<参考文献>

- 1) 市川康夫：近現代の出作りにみる山村の生活と農業形態—長野県旧清内路村を事例として—、信濃 65(10), pp. 858-870, 信濃史学会, 2013 年 10 月
- 2) 森謙二 編：『出作りの里 その民俗と歴史』, 新葉社, 1989 年 5 月, 333p
- 3) 千葉徳爾：下清内路の出作り, 伊那, pp. 3-8, 伊那史学会, 1974. 1

- 4) 愛知大学地理学専攻生清内路実習班：下清内路の出作りの変貌, 伊那, pp. 10-16, 伊那史学会, 1974. 4
- 5) 千葉徳爾：清内路の「出作り」について, 伊那, p. 10, 1967. 9
- 6) 大原一興：清内路コース～出づくりの里探訪コース～, pp. 37-38, エコミュージアム研究, No. 17, 日本エコミュージアム研究会, 2012. 3
- 7) 市川康夫：須坂市日瀧原における出作りと定住化—明治以降の動向を中心に—, 地域研究年報, (33), pp. 99-108, 2010. 10
- 8) 矢ヶ崎孝雄, 白山麓における出作りの研究：石川県白峰村桑島の「むつし」文書について。文教大学教育学部紀要(22), pp. 25-34, 1988 年
- 9) 矢ヶ崎孝雄：白山麓における集落の成立に関する試論：出作りと親村, 日本地理学会, 発表要旨集(62), p. 97, 2002 年
- 10) 小川弘司：吉野谷村中宮における出作りの分布, pp. 77-81, 石川県白山自然保護センター研究報告第 29 集 2002 年
- 11) 規工川宏輔：熊本県小岱山々麓における出作りによるみかん栽培, 人文地理, 16(6), pp. 597-613, 1964 年
- 12) 吉田伸之：山里の文節的把握—信濃国伊那郡清内路村を事例として, pp. 280-317, 権藤・吉田編『山里の社会史』所収, 山川出版社, 2010 年
- 13) 全村博物館構想策定委員会,『阿智全村博物館構想の提言』, 2007, p. 5
- 14) 権藤史子・大原一興・藤岡泰寛：エコミュージアムと観光の両立についての考察—長野県阿智村の全村博物館構想を昼神温泉の観光に生かす可能性—, 日本建築学会大会学術講演梗概集, pp. 395-396, 2011 年
- 15) 阿智村教育委員会,『わたしたちの阿智村』, 2014 年
- 16) 坂口香代子：花火師たちの里・清内路の手づくり花火, 中部圏研究, pp. 83-101, 中部圏社会経済研究所, no. 171, 2010. 6
- 17) McAdams, D. P., & de St. Aubin, E. (1992). A theory of generativity and its assessment through self-report, behavioral acts, and narrative themes in autobiography. *Journal of Personality and Social Psychology*, 62, 1003-1015

<研究協力者>

桜井正彦	阿智村文化財委員会委員
中里信之	阿智村役場協働活動推進課学芸員
和田千紘	横浜国立大学学生 (2015 年度)
山本奈生	横浜国立大学学生 (2016 年度)
我妻祐一郎	横浜国立大学大学院修士課程
高橋絵里	横浜国立大学大学院修士課程